われは明治の児ならずや（永井荷風）

根来 澪子

四月三十日は永井荷風の祥月命日である。昭和三十四年同日、千葉県市川の自宅で、現在さかんに言われているところの孤独死で、訪ねてきたお手伝いさんによって発見された。死因は胃潰瘍による吐血で引き起こされた心臓発作だという。享年七九歳。がらんとした粗末な部屋には常時持ち歩いていたボストンバッグのなかに何千万かの預金通帳と、何十万かの現金が残されていたのが大きな話題になった。晩年に授与された文化勲章は新聞紙につつまれて押し入れの中に入っていたという。永井荷風らしい人生の終わり方であった。

ここ十年来、私はほぼ毎年、荒川区三ノ輪の浄閑寺で執り行われている「荷風忌」に参列している。神奈川の西部から三ノ輪まではかなり遠い。私鉄と地下鉄を乗り換えて、優に二時間はかかる。しかも荷風の熱烈な愛読者だというわけでもない。最初に参列したとき、御寺の受付で名簿に名前を記入すると、翌年からはがきで案内状をいただけるのだ。

浄閑寺

百人以上は収容できると思える本堂はいつも満席である。ほとんどが年配者だが、なかには若者のグループもいたりして活気がある。住職による朗々たる法要の読経のあと、その時によって演題は異なるが、学者や評論家の講演、または荷風の好きだったという落語や講談などがあり、荷風についてあまり知識がなくても楽しめる。

数年前になるが、女性講談師、宝井琴桜の『すみだ川』の講談を聞き、大いに感動したことがある。講談に関しては人によって好き嫌いが分かれるが、私はあの種の朗読の技術はすごいと思う。一気に畳みかけて

クライマックスに持っていく手法は迫力がある。それまで無関心だった講談というものに対する関心が大いに増したといういい機会になった。

昨年は川本三郎の講演があった。彼は私の大好きなエッセイストで、東京散策の本を何冊か読んでいる。荷風の本格的な研究者とのことで、期待通りの内容であった。題目は「荷風の描いた老人」。配られた資料はワープロ打ちしたものではなく、ノートにボールペンで書いてコピーした直筆のものを提供してくれた。今も大事に保管している。荷風文学の大きな特色は老人への愛情だという。代表作を何冊か引用し、そこに描かれている老人の、娼婦や女給、踊り子たちに向ける優しいまなざしについて熱く語った。青年期、壮年期をとりあげる作家が多い中で、近代でこれだけ老人を描いた作家もめずらしい、なぜ老人に惹かれるのか。それは文人趣味（庭いじり、焚火、墓参など）であったり、西洋から戻ってきて、近代日本の急激な変化への違和感を持ち、世捨て人志向となった荷風の、ある種、フィクションとしての「老い」を装うことによって世の中へのかかわりを避けていくという生き方もあったのではとのこと。納得のいく講演であった。

今年、平成三一年四月三〇日。翌日からは元号が「令和」に代わるという平成最後の記念すべき日。生前退位ということでジャーナリズムはこの代替わりを、年末の大晦日以上のはしゃぎ方で報じていた。あいにく朝から雨であった。しかも予報は終日雨。夕刻はますます激しくなるとのことで、老齢の身を顧みて逡巡するものがあった。しかし、まさに平成が終わろうとする記念すべきこの日に荷風忌に参列するのは意味のあることのように思えて、予定通り出かけて行った。

法要の後の講演は「永井荷風と志賀直哉――それぞれの遊び――」。講師は上智大学文学部教授小林幸夫氏である。永井荷風と志賀直哉の接点はあまりないようだ。しかし、明治、大正、昭和と生き抜いた、あまり年の違わない（荷風は明治一二年、直哉は一六年生まれ。四歳違い）長寿を全うした二人の作家を比較してみるのも面白いということのようだ。例えば女性への思い入れ方、小説における女性表現、新聞記事でのとり上げられ方の対比など、めずらしい内容で、誰にでも興味を呼びそうな内容であった。三時半ぐらいに終わったので、例年なら下町の風情のある近辺の街並みを散策するのだが、雨の中ではどうしようもない。お茶も飲まずにまっすぐに帰宅した。

「永井荷風忌」を執り行う「浄土宗栄法山浄閑寺」は地下鉄日比谷線三ノ輪の駅から三分ほどの、大通りからすこし外れた静かな場所にあり、通称「投げ込み寺」と言われている。旧吉原遊郭に近く、引き取り手のない遊女の遺体を葬ってきたことで有名になったという。その人数二万人をこえているともいわれている。本堂の裏には墓地があり、「新吉原総霊塔」が建っていて、台座には画家であり、川柳師でもあった花又花酔の次の句が刻まれている。「生まれては苦界　死しては浄閑寺」。

道を挟んで塔の向かい側には荷風の文学碑が置かれている。建築家谷口吉郎の設計になるもので、御影石に刻まれた立派な碑である。

戦後に発売された詩集『偏奇館吟草』の中の「震災」からとった詩である。「今の若き人々　我にな問いそ　今の世をまた来たる時代の芸術を　われは明治の児ならずや（略）」と続き、二五行に及ぶかなり長文の碑である。

撰文として「（略）谷崎潤一郎をはじめとする我ら後輩四二人故人追慕の情に堪えず、故人が生前「娼妓の墓乱れ、倒れ」ているのを悦んでしばしば杖を曳いた（昭和一二年六月二二日の日記の言葉）この境内を選び、故人ゆかりの品を埋めて荷風死去四周年（昭和三八年四月三〇日）を記念して荷風碑を建てた」とある。その傍に筆塚があり、荷風の筆と二本の歯が埋葬されているという。

浄閑寺の寺務所では『浄閑寺と荷風先生』という冊子を販売している。少し長いが抜粋してみる。「（略）浄閑寺の開基に遅れること二年、日本堤の中ほどに出現した新吉原は急速に発展して江戸の名所の一つとなったがそれは反面、薄幸の遊女たちの痛ましい犠牲の上に咲いたあだ花に過ぎなかった。もともと身を売ったものが病気になり、衰え果てた行く末ほど哀れなものはない。捨て犬のごとく看取られずに死んでいく遊女たちの多くは日本堤の上をたどって堤の北側、日光街道に近い箕輪の浄閑寺に無縁仏として葬られるのが例となったのである。かくして吉原創業以来吉原廃業までの３００年間に浄閑寺に葬むられた遊女は実に二万五千人に及んだ。（略）紅灯の巷の影に哭いた遊女哀史をそのまま髣髴とうかがわせるものがある」。

続いて浄閑寺と荷風とのかかわりあいを日記に照らし合わせて丁寧に記録している。「ああ、箕輪の浄閑寺。（略）この無縁塚に葬られる娼婦は不幸の中にも不幸で捨てるに捨てられない死骸が蒼楼裏口から担ぎ出され、ここに骨と変わらせられてしまうのである」と荷風は嘆く。

荷風はしばしば浄閑寺を訪れ薄幸の遊女たちを悼み、自らも浄閑寺に葬られることを望んだ。昭和１２年の「断腸亭日乗」に次のように書いている。「今日の朝三〇年ぶりにて浄閑寺を訪れし時ほどうれしきことはなかりき。（略）余死するの時、後人もし余が墓など建てんと思わば、この浄閑寺の娼妓の墓乱れ、倒れたる間を選びて一片の石を立てよ。石の高さ五尺を超ゆるべからず　名は墓荷風散人の五文字をもって足れりとすべし」。

また、現代の我々の思いにも通じることだが日記に次のようにも書いている。

「（略）葬儀不執行の理由は霊柩自動車を好まず、また紙製の造花、ことに鳩などつけたる花環を嫌うためなり」。

まことに荷風らしい美意識だと大いに共鳴するのだ。浄閑寺はそのような縁で「荷風忌」を何十年にもわたって行っている。しかし実際に荷風が葬られたのは雑司ヶ谷の永井家の墓所であった。

明治、大正、昭和を通して活躍した文豪永井荷風を、現代の若い人達はどのようにとらえているのだろうか。荷風の小説は好まれているのだろうか。格調高い擬古文の混じった文章。荷風生誕年一四〇、没後六〇年を経た令和元年、現代ではもはや知る由もない花柳界、私娼窟の世界を好んで描いた荷風は受け入れられているのだろうか。新進気鋭の若い研究者、持田叙子の『荷風へ、ようこそ』は大変に平明な視点と言葉で、荷風の作品からふんだんに文章を引用し、専門書であっても実に親しみ深く荷風の人間性と文学を語っている。「荷風の家にようこそ」と招じ入れられ、「荷風とティーブレークを共にして、」「荷風のレトリックとしての花柳界のお話を聞き、」「四〇代でさっさと老いのなかにもぐってしまって世相を評する荷風の老人文学」についての語り口は、絵巻物がくりひろげられるかのような荷風物語りというべきだろう。楽しく読ませるところは、持田叙子は研究者であると同時に一流の作家に匹敵するような感性のもち主によるものと思う。荷風の理解書としてそばに置いて時時読み返したくなるような、優しい美しい荷風論である。

しかし私はそのほかの荷風論、定番と言われる佐藤春夫の『小説永井荷風論』や中村光夫の『評論永井荷風』その他、荷風に関する研究書を読んでいないし、岩波書店全七巻に及ぶ『断腸亭日乗』も部分的にしか知らない。ただ、数年前、書棚の本を丸ごと古本屋に処分した時、岩波書店の『荷風随筆』全五巻（昭和五七年発行）は売らずに取っておいた。当時心酔していた平野啓一郎の本とともに。たくさんの大事な蔵書をすべて処分したのに、なぜあまり熱心な読者でもなかった荷風の本を残したのか、我ながら不思議である。

昭和三〇年代、私の青春のころに、人並みに荷風を読んだ。しかし代表作と言われる花柳界を描いた一連の小説、例えば『つゆのあとさき』『腕比べ』など一向に感ずるところがなかった。代表作と言われる『墨東奇譚』も理解できなかった。当時私が小説に求めていたものは壮大なスケール、豪華絢爛たる世界であって、まったく馴染みのない紅灯の世界を、同じような風景描写と、ねちねちと繰り返される通俗的な会話で表現

される世界は退屈なだけであった。しかし、後で知ったことだが、「芸者を主人公にした花柳小説を執筆したのは、時世で好みが芸者から離れていくのを感じ、また、女給を主人公にしたのも、女給の流行が盛りをこえたから」だという。愛する彼女たちが流行からすたれて忘れ去られていく様を憐れんで書いた、というようなことを知って心を打たれた。滅びていくものへのやさしさを荷風は生涯持ち続けていたようである。

また、フランスの作家、ゾラやモーパッサンなどに傾倒し、ヴェルレーヌやボードレールの訳詩から見る荷風の退廃趣味、耽美趣味にある種のあこがれをもってはいた。フランスに一一か月滞在して書いたという『ふらんす物語』は文体もシャイで、世情風刺の構え方も小気味よくて江戸の昔を懐かしみ、日本の近代化に反発した荷風の面目躍如たるものがある。荷風は、日本には珍しく、なによりも「高踏派」の作家ではないかと思っている。高踏派ぶりを発揮した『ふらんす物語』は何度読んでも痛快であり「巴里のわかれ」などは荷風の心情がひしひしと感じられ、荷風はそんなにも巴里が好きだったのかと、心打たれるものがある。尤も『ふらんす物語』は何度か発売禁止になり、紆余曲折をへて、現在の体裁になったらしい。

また、晩年、市川の独居で一人暮らす孤独の荷風老人が、浅草のストリップ劇場「ロック座」を訪ね、踊り子たちと歓談し、夜な夜な彷徨っている姿が写真にとられ、マスコミの話題になったりした。「生活？そんなものは召使にまかせておけ」とうそぶいた高踏派の作家の言葉を地で行くように、地位にも権力にもこびないひょうひょうとした生き方を通したのは荷風ならではの個性だと思うし、一種奇矯と思える日常は大いに関心をもって報道された。身長一七八センチ、若いころの写真は風格があり服装もダンディでなかなかの男前である。前歯の欠けた貧相な晩年の荷風とはイメージがだいぶ違うようである。

高齢化の進む現代は、盛んに孤独を勧めたり、孤立を防ごうとしたり、そんな指南書に人気があるようで、新聞の広告欄にもその手の本の広告が毎日のように氾濫しているが、それは他人が指図する問題ではないと思っている。先天的に孤独に恐怖を感じる人と、生来が孤独に鈍い感性を持っている人がいるのに一様にあれこれ高みから指図するべきではないといつも思っている。荷風は人に勧められても医者に行かず、むしろ自ら選んだ自宅での一人の死であったとおもう。三島由紀夫が死を選んだ場所が、彼が最も望んだ市谷の駐

屯地であったように。（石川淳の『敗荷落日』における荷風への追悼文は容赦のないものである。底に荷風への深い尊敬と愛情があってのことというが、あれだけの厳しい分析は石川淳本人にはねかえってくるものと思うほどである）

その後、家庭の主婦になって子育ても終わった五〇代、地域の公民館活動で「読書会」という趣味の会に参加し、その会で荷風の『花火』を紹介されて読み、衝撃をうけた。老人趣味とか厭世主義、耽美主義などでひとくくりにしていた荷風であったが、深奥の原点を見る思いがした。ありふれた荷風論でも、『花火』は荷風の価値観を明確に示した重要な作品と位置付けているようだ。政治を語らず、理想を唱えず、権力や社会から制約を受けず「静かなところで小さく暮らす」という、太平の民として生きていくと宣言した彼の姿勢を明確に示す作品であった。それを私は五〇代にして初めて読んだ。重要な部分を引用すれば次のようである

「明治四四年、慶應義塾に通勤するころ、わたしはその道すがら折々市ヶ谷の通りで囚人馬車が五、六台も引き続いて日比谷の裁判所のほうへ走っていくのをみた。わたしはこれまで見聞きした世上の事件の中で、この折ほど言うに言われない厭な心持のしたことはなかった。わたしは文学者たる以上この思想問題について黙していてはならない。小説家ゾラはドレフュー事件について正義を叫んだため国外に亡命したではないか。しかしわたしは世の文学者とともに何も言わなかった。わたしはなんとなく良心の苦痛に耐えられぬような気がした。わたしは自ら文学者たることについて甚だしき羞恥を感じた。以来わたしは自分の芸術の品位を江戸戯作者のなした程度まで引き下げるにしくはないと思案した」。

荷風が目撃した囚人馬車は幸徳秋水の一団であった。世にいう大逆事件の首謀者たちである。幸徳秋水は明治の思想家、社会主義者、無政府主義者であり、時の政府によって弾圧された象徴的な事件であった。天皇暗殺の嫌疑をかけられ、菅野スガ、大石誠之助らとともに、１２名が処刑された。（実際には秋水は暗殺計画には関与しなかったと言われる）。世は社会主義弾圧の時代であり、その後、大杉栄事件などが続く。菅野スガ、伊藤野枝、金子文子など、思想に殉じた女性たちが事件に巻き込まれ、刑死したり、虐殺、自殺などに追い込まれた。寂聴こと瀬戸内晴美は、それらの女性

闘志家の伝記を綿密な取材を重ねて詳しく書いている。そんな時、寂聴の筆は冴えるのである。私は伊藤野枝の『転機』という作品に心酔している。それはまた別の機会に書きたいと思っている。

大逆事件に心騒がせながらも荷風は行動せず、表立って批判もしなかった。ドレフュース事件を糾弾したゾラの勇気がなければ戯作者に身を落とすしかないと政治から身を引いたが、当時のすべての文学者が沈黙したわけではなかったようだ。徳富蘆花は処刑から一週間後、一高の学生から招かれて、本郷の講堂で次のような講演をした。「諸君、幸徳君などは時の政府に謀反人とみなされ殺された、謀反をおそれてはならぬ。謀反人となるを恐れてはならぬ。（略）新しいものは常に謀反である」「身を殺して魂を殺す能わざるものを恐れてはならぬ。肉体の死は何でもない、恐るべきは霊魂の死である」。

荷風は上流階級の家庭に生まれた。父、久一郎はプリンストン大学やボストン大学に留学経験がある官吏であり、母も歌舞伎や邦楽に明るい才媛であった。ブレックファーストにクロワッサンと紅茶をたのしむ優雅な家庭に育ったと思う。その荷風がアメリカ、さらに待望のフランス外遊後に、急速な日本の近代化に反発し江戸の昔を懐かしみ、時代に背を向け、耽美主義の世界に入っていったのは皮肉である。２度の結婚、離婚をへて、晩年は親戚とも断絶し、自由気ままに一人暮らしを楽しんだ。大長編の大作はないように思うが、その生き方、随筆からうかがえる、社会文明批評は今なお新しい。

漱石、鴎外が官費留学であったのに対して、荷風は私費留学であったので国に縛られることはなく、文学者になることを目的とし、そのためにだけ外遊した唯一のひとだと川本三郎は言っている。

永井荷風を語る上で欠かすことのできない浄閑寺。１０年ほど前、最初に「荷風忌」に誘ってくれたのは同じサークルに属していたＴさんであった。七、八十代の高齢者が集まっている「エッセイの会」で、何人かの人に声をかけ、それぞれ都合のつく人同士で一緒に出掛けた。私はほとんど毎年出席したが、三人、四人の時もあり、一人の時もあった。もう６，７年も前になるだろうか。声かけをしてくれたＴさんの案内で、好天に恵まれたその日、サークルの仲間４人で「荷風忌」に出席した後三ノ輪の近辺を歩いたことがあった。

Ｔさんは吉原大門の近くで生まれ育ったという。新

吉原遊郭の出入口にあった大門は、今は存在しないが交差点の名前として残っている。彼は待乳山小学校の出身だとのことで、学校の前を通り、懐かしそうに校庭をのぞき込んでいた。子どもたちの歓声が運動場いっぱいに響いていた。それからしばらく歩いて隅田川のほとり、今戸にでた。ちょうど、広津柳浪の『今戸心中』を読書会で読んでいるときだったので感慨深かった。吉原の遊女が今戸の川岸に身を投げるという悲しい物語である。いまは晩春のうららかな隅田川であった。その後、待乳山聖天を拝み（大根がそなえてあるというユニークなお寺）浅草にでて「神谷バー」にはいった。

一八八〇年創業、日本最初のバーとして浅草一丁目一番地に誕生したそうだ。「デンキブラン」と名づけられたカクテルが有名とのこと。店内は昭和の匂いのするレトロな雰囲気で、大勢のお客でにぎわっていた。男性二人はデンキブランを注文したが、アルコールが強いということで私とHさんは葡萄酒にした。食事もおいしかった。巷に明かりがともり、浅草の夜は甘く漂い始めていた。

もうずいぶん昔の思い出になってしまった。サークルは解散し、私達も散りぢりになって、ほとんど会うこともなくなってしまった。年に一度、「荷風忌」で会うことだけが唯一の機会だが、それもお互いに高齢化して、もう三ノ輪まで足を運べなくなるのも時間の問題であろう。たった一人でも歩ける限り私は出かけたいと思う。浄閑寺の住職の「南無阿弥陀仏」の読経が私の耳にしっかりと残っているのだ。

私の父は東北の田舎町の町医者であった。大正、昭和の中頃までの開業医には休日がなく、急患があれば夜中でも起きて診察するし、明け方に雪道を往診することもあった。「医は仁術」と言われた時代。二四時間仕事に追われ、自分の自由な時間をもてなかった時代。父は仙台医専（現東北大学医学部）を卒業し、海軍軍医に誘われたこともあったと聞くが、郷土のまずしい医療を思い、地域医療に専念する道を選んだのだという。母は看護師で共働きの家庭に育ったので、子供の

ころ両親とあまり接した記憶がない。とにかく忙しく、働きづめの人生だったと思う。

父はそれでも晩年、俳句の趣味を持ち、俳人水原秋櫻子の門下にはいり、秋桜子主催の俳誌『馬酔木』に投稿、数年たって、常時4、5句が選出され、誌上に掲載されるまでに上達した。俳号を「零余子（むかご）」といった。地区の俳句仲間と我が家の離れで句会をやっていて、その日ばかりはご機嫌だったのをおぼえている。

あまりにも自由な時間をもてなかった医者という職業を子供たちに強いることはなく、5人兄姉だった私たちは誰一人医者になることなく、我が家は他人の手に渡った。晩年、父は仕事から解放され、神奈川の私の家にも遊びに来て丹沢のふもとの風景を気に入ってくれた。

父はベレー帽をかぶり、傘をもって、よく近辺を散策して悦んだ。本屋をまわり、疲れるとコーヒー店に入って休み、俳句を詠んだ。父にとって最晩年の心休まる日々だったと思う。父は自分で語ることはなかったが、荷風に憬れていた節がある。次の句がそれを物語っている。

おぼろ夜や　素足に軽ろき、女下駄

まさに荷風を模した句であろう。誰一人、郷里に残ることのなかった子たちを思って作った次の句は私にとても重い。

子ら遠く　もとの二人が　もとの炉に

（二〇一九年六月）